

特定行為を看護の視点で捉えることで 処置がケアになる

社会医療法人 北海道循環器病院 集中ケア認定看護師 佐藤大樹氏



特定行為研修を修了した
佐藤大樹・集中ケア認定看護師

特定行為研修により、
一番メリットを

受けるのは患者自身

私は、特定行為研修を修了した認定看護師の立場から報告します。はじめに、特定行為研修を受けるきっかけについてお話しします。

私は長年、ICUに勤務していました。ICUで集中ケア認定看護師として、患者さんの循環動態管理、呼吸器管理、早期リハビリ

講演に引き続き行われた実践報告では、札幌市中央区の社会医療法人北海道循環器病院の佐藤大樹・集中ケア認定看護師が、日本看護協会の特定行為研修修了看護師として、受講の経緯をはじめ、研修・実践で感じたことなどについて話しました。その中で、医師の思考過程を学ぶことで看護師としての視野が広がったこと、さまざまなプレッシャーの中で苦しんだことなども紹介。特定行為を看護師が行うことに関する、「看護の視点で捉えることで処置がケアになる」と指摘しました。

テーションなどに取り組んでいました。

約4年勤務後、一般病棟に異動となりました。その中で、病棟では目の前にモニターがないということに、まずびっくりしました。

ICUに長くいると、器械が目

前にあることが当たり前になってしまった。ある意味、器械が自分を守ってくれていました。それがないという状況に、すごく怖さを感じました。

その後、日本看護協会が認定看護師を対象とした研修を開始したと知り、興味を抱きました。ただ、研修内容を見て、「本当に自分でできるのか」とプレッシャーも感じました。同時に、この研修を受けることで自分自身がステップ・アップできるのではないか、

カルアセスメントで得られる情報え、フィジカルアセスメントを取り組みました。その中で、フィジカルアセスメントで得られる情報がとても重要だということを改めて感じ、その重要性を痛感しました。そこで、基本に立ち返ろうと考え、フィジカルアセスメントに取り組みました。その中で、フィジカルアセスメントで得られる情報がとても重要だということを改めて感じ、その重要性を痛感しました。

そうした頃、特定行為研修がスタートするという情報を聞きました。

決意しました。



座長を務めた札幌医科大学附属病院
急性・重症患者看護専門看護師の春
名純平氏



市立札幌病院
山村竜彦氏



旭川医科大学病院
酒井周平氏



幌医科大学附属病院
中野沙矢香氏



毎道循環器病院
三浦真裕氏

ICUダイアリーは、「患者さんの記憶補正、うつやPTSD予防に有効では」と述べたほか、患者者が亡くなった場合も、「患者さんの死を理解し、死と向き合うなど、ご家族の複雑性悲嘆の予防に役立つ可能性があるのでは」と話しました。

「病棟スタッフとの連携も促進され、患者さんの予後の改善が期待できる」としました。

患者への術後の早期の Family-HELP の試行と評価に関する研究」を紹介。「ABCDEF GH バンドルとして実施すれば大きな効果があるのでは」とも述べ、「こうしたツールを使いながら、患者の時間軸の中で支援できるよう取り組んでいく考えを示しました。市立札幌病院集中ケア認定看護師の山村竜彦さんは、PICS の予防は、「できる限り早期離床させ、リハビリを行うこと」と強調するとともに、「ICUの中でのいか

「生活をしていただくか、日常生活援助が大事」と指摘。「患者さんにとってのゴールはもとの生活に戻ること」であることから、「ICUスタッフがゴールを共有して関わることが大切」としました。

同病院で実施したりハビリに関する調査結果を基に不穏・鎮静評価スケールを導入したところ、鎮静の調整や生活のリズムを意識した支援など、看護師の意識や介入に変化が見られたことなども報告しました。

このセミナーは、昨年9月に発生した北海道胆振東部地震により開催が中止となっていたもの。今回は、PICSの予防・対策をテーマに、講義・パネルディスカッションを実施しました。

PICS (post intensive care unit) 退室後の継続ケアへ、病棟スタッフの理解、連携が重要

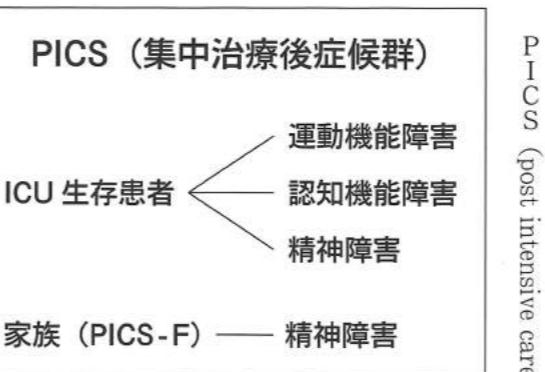
ICU 生存患者

運動機能障害

認知機能障害

精神障害

家族 (PICS-F) — 精神障害



每道医療大学講師
神田直樹氏

急性・重症患者看護専門看護師の神田直樹さんは、PICSの概念やリスクファクター、予防戦略、基本的な対応法である「ABCDE」、「FGHバンドル」などについて解説。48時間以上の集中治療、高齢、1回以上のせん妄発症などのリスクファクターのある患者に対し、「いかに積極的にPICS予防ができるかで、患者さんの長期予後も変わってくる」と指摘。PICS予防における適切な看護ケアの重要性を強調した上で、「自施設で何ができるのかを考えるヒントになれば」とセミナーの成果に期待しました。

パネルディスカッションでは、4人のパネリストが自施設におけるPICS対策の現状等を報告。北海道循環器病院ICU/CCU看護主任で集中ケア認定看護師の三浦真裕さんは、患者・家族に対するPICSの説明について、術

看護師のための重症患者管理セミナー2018（日本集中治療医学会北海道支部主催）が札幌医科大学で開かれ、P－C S（集中治療後症候群）予防をテーマに実践報告・パネルディスカッションなどを行いました。ICUに勤務する看護師約50人が参加。P－C Sへの理解を深めるとともに、各施設に見合ったP－C S対応法を学ぶべく、情報を交流しました。